



今回、鍵井保秀は、ステップスギャラリー内に加え、階下のギャラリー58を繋ぐ階段に原画となるアクリル画「PASSION」シリーズを大小合わせて29点、ギャラリー58には透明シートにデジタルプリントした「LOVE POP」シリーズを22点展示した。

揺らめきやすくなる。そこに生まれる不安定さに、鍵井の制作の意図がある。鍵井はまた、アクリル画をスキャンすることによって画面に文字を埋め込み、イメージの追及に拍車を掛ける。そして名画と呼ばれる一連の作品群が持つ印象を、自己の作品として変換させるのだ。それによって名画は全く異なる存在に変化する。ここにも、光と影が投入される。楽しさと不安定は何時でも同一だ。

「PASSION」シリーズの主題は主にジャズである。ジャズが好きだ、楽しく唄う、楽しくなるという雰囲気が、充分に発揮されている。連なる大型のスクエアの画面は、意識の連続性を表している。溶解した光の中に、具体的な人物像が描かれている。階段に展示された花と女性を組み合わせた作品群も魅力的だ。イメージを徹底的に追いかける。

「PASSION」が原画、「LOVE POP」が本画と見ると、鍵井の本質に届かなくなる。鍵井は本画のために原画を制作しているのではない。注目すべきことは、二つの絵画の技法を往復している姿である。素材と格闘し、様々な試行錯誤を繰り返し、一つの結果を導くのが、イラストレーターの仕事である。鍵井が複数の方法論を取るとしても、決してイラストレーターではなく、美術の領域に踏み止まるのは、複眼でも単眼でも無い、複数のイメージを常に同時に獲得する点にある。



「LOVE POP」シリーズの透明シートは、三枚、若しくは四枚が組み合わせられている。一枚一枚に目を投じると、溶解した光がハートの形に分散され、重なることによって一枚の絵画に還元される仕組みとなっている。シートの間には光が取り込まれ、壁面に影が投影される。この仕組みを強調するために、作品は巨大化する。勿論、小品でもその効果は充分に発揮されるが、大きいほうが影は広がり、

すると美術の領域とは何だろうか。クライアントの存在の有無でも、ポスター、パッケージといった他の媒体に転用される/されないの問題でもない。美術の根源には人間の営みが隠されている。この人間の営みを凝視することが、腐り切った資本主義と権威志向に対する唯一の武器になるのではないかと、私は考えている。

すると美術の領域とは何だろうか。クライアントの存在の有無でも、ポスター、パッケージといった他の媒体に転用される/されないの問題でもない。美術の根源には人間の営みが隠されている。この人間の営みを凝視することが、腐り切った資本主義と権威志向に対する唯一の武器になるのではないかと、私は考えている。

